■教育の病弊の根源は“天職”意識の喪失

今、日本は経済的には大発展を遂げ、多くの日本人が物質的に非常に恵まれた生活をしてゐますが、貧しかった時代に比べて果して幸福になったと言へるでせうか。“否”であると思ひます。

20余年前、インドを旅行した時、そこに住む人々の生活が話にならぬ程貧しいのに、その顔は幸福に満ち足りたやうに輝いてゐた事を今でも忘れる事が出来ません。その時同行した仲間に中・高校生の姉妹がゐて、帰宅して貰った手紙に「あんなに貧しい人たちがどうしてあんなに幸福に満ち足りた顔をしてゐるのでせうか。不思議でなりません」と書いてありました。中・高校生の眼にもさう感じさせる程のものがあったのです。幸福は金や物には依らず、心に在るのです。

「“教”といふ字は『父と子と交はる』ことを表した字であり、昔は家庭が職場でもあったから、子は常に父親の仕事を見てそれを真似し、それが家業を継ぐ修業になった」と前に述べました。これが「教育の原点」であるとも言ひました。家業を継ぐ継がぬはどうであれ、教育の原点は「確(しっか)りした職業人としての基礎を作る」ことに在るのです。これは一に職業といふものをいかに観るかに懸ってゐるのです。“天職”といふ言葉があります。「神から授かった職業」といふ意味の言葉です。「人は誰でもその人にしか無い個性を神から授けられてゐてそれで社会に貢献するものである」といふ考へ方に依るものですが、職業を選ぶとは、この「天職を見付ける」ことであるのです。

前述の靴屋の主人のやうに、自分の職業とその腕前に誇りを有ち、人々に履き心地の素晴しい靴を提供する事に生き甲斐を有って働く事こそ、真の幸福を得る道であると思ひます。このやうな人を創る力を有つ者は、何と言ってもその父親でせう。父親が自分の職業とその腕前に誇りを有ち、人々に喜ばれる仕事をしてその姿を子供に見せてゐれば、その子も自然とそのやうな人間に育つでせう。だから、「教育は、父親が自分の仕事とその腕前とに自信と誇りを有って、それを子供に誇示する事に始まる」といふのが私の考へなのです。

それで私は「今の教育の病弊の根源はこの“天職”意識の喪失に在る」と言ひたいのです。給金や休暇を第一に仕事を選んでゐるのであるから“天職”といふ意識など全くありません。だから「仕事を努力して完成させる事の楽しさ」を知りません。これでは、腕前も誇示できる程のものが磨ける訳が無く、従って職業に誇りも有も得ません。だから、子供は父親を偉いと思ふ気持も湧かず、従って親の仕事を継いでその道で社会に大いに貢献しようといふ気も起りはしません。この“天職”意識の喪失こそが教育の病弊の根源と私は思ひますが、それは明治維新の世襲制の廃止に始まり、戦後の家族制度の廃止によって一層拍車が掛ったのです。